

第7セッション「多民族国家の民族主義をどう見るか」

報告

中国における多様な民族主義を考える
—中華民族の言説とジェディディズムの成立過程を通じて—
◆小嶋祐輔氏報告に対するコメント◆

王 柯

〈神戸大学〉

—

「中華民族」はあくまで一種の言説であり、国民統合を実現させる万能薬にならない。しかし問題はこれだけではない。むしろ重要なのは、中国が「中華民族」による「国家」であると強調すればするほど、虚構の「民族国家」であることが感じられ、近代国家としての正統性が疑われることであろう。ⁱ

小嶋論文は、「果たして、中国という一つの国家においては多様な「民族主義」の存在は許容されないのであろうか」という問いかけを切り口にしてしている。しかしその問題意識の深層に、「中華民族」の言説が抱えている問題だけではなく、「中華民族」がその文化的、脱領土的性質によって「多元性」を重視している事実が研究者によって軽視され、中国の現実的国家利益の道具にすぎないというふうな単純な理解で取り上げられることも問題である、という考え方も読み取れる。これは、実に重要な問題提起である。

二〇世紀の中国に「中華民族」と「漢民族」・「少数民族」、という性格が異なる二種の「民族」が誕生したことは、研究界で周知の事実である。二つの「民族」が併存するという不条理によって、「中華民族」は、中国国家が「少数民族」を統合し、漢族がほかの「少数民族」を従属させる道具に過ぎないと容易に批判されてきた。

「中華民族」とは、「少数民族」の問題にいかに対処すべきかというレベルで考案された用語であると証明できれば、少数民族統合のための道具であると疑われてもしかたない。しかし事実として、二〇世紀中国における「中華民族」の出発点は、少数民族問題の解決ではなく、国民国家論をいかに中国に実践すべきかということだった。そのため、中国における「中華民族」問題の本質は、決して漢族と少数民族という次元ではなく、国家の次元で見るべきものであった。そして「民族」を巡っておこった問題も、たとえ「漢族と少数民族」という次元で発見できるとしても、基本的に国民国家論の産物にすぎず、その根源は国民国家論という思想と実践にあった。ⁱⁱ

民族間関係という領域に限って中国の少数民族問題を孤立的に見ることは、少数民族問題解決の糸口を見つけるのが難しい。逆にいえば、少数民族の視点を欠落すれば、国民・主権・領土の統合といった、二〇世紀の中国が抱えている諸難題の本質を見失う可能性も十分にあった。小嶋論文は、まさにこのような研究の視野に対して警鐘を鳴らしているのであろう。しかし、

この問題を解決するには、現在の研究の目的と研究の手法が事実上乖離し、相克している現状を打破する必要がある。つまり、研究者として、近代国家を目指す中国による国家建設に対する分析においてだけでなく、その分析手法も「民族国家」という罫から脱出しなければならない、ということである。

二

小嶋論文について若干の疑問が感じられるのも、論文の目的と手法が乖離している、という現象が構造的に存在していることである。つまり、論文が一方に「中華民族」は一種の虚構にすぎないとしながらも、近代東トルキスタンの改革思想（ジェディッディズム、Jādidism）がナショナリズムであり、中国国内に（少なくとも）同時に二つの「民族主義」（小嶋論文はそれを同時に「ナショナリズム」と呼んでいる）が存在していると主張することである。

たとえば、論文は、ネイションやナショナリズムは過去からの継承性とかつての共同体(エトニ)のネイションへの変容・再編プロセスが重要である、というスミスの学説を以て、中華民族を巡る言説と近代ウイグル社会の「改革思想」（ジェディッディズム、Jādidism）を比較し、そしてその継承性や変容・再編のプロセスにおいて多くの類似性が見出せるという結論を出している。もしかすると、小嶋論文は実体としての「中華民族」は虚構にすぎないが、その「創出」のために尽くした諸言説がナショナリズムの表現であると考えているかもしれない。そうであれば、ウイグル社会におけるジェディッディズムが支えている実体も一緒に議論の対象にすれば、はじめてジェディッディズムが一種の民族主義（ナショナリズム）であるかどうかを判明できるのではないだろうか。しかし、小嶋論文はこのような実体について明言しなかった。

小嶋論文においてジェディッディズムと呼ばれている運動の実態については、いまだに究明されていない部分がある。しかし運動の主体は間違いなくウイグル人で、その舞台となったのはウイグル社会であった。そして、この運動において、「東トルキスタン民族」と呼ばれる抽象的な民族共同体はなかった。ⁱⁱⁱこの点からも、ジェディッディズムが、「中華民族」を巡る言説と比較して、それが同じナショナリズムであるという小嶋論文の論点の弱さが感じられた。

小嶋論文を読む限り、中華民族を巡る言説と近代ウイグル社会のジェディッディズムを並列して比較する目的は必ずしも明白ではなかった。しかし、たとえナショナリズムの視点から近代ウイグル社会のジェディッディズムを検証しても、それが中国における近代国家建設の思想が始まった時期の「漢民族主義」または「漢ナショナリズム」の実態に近いと感じざるを得ない。^{iv}そして、中国が民族国家を目指す手段としての「中華民族説」が適切ではないというならば、欧米の学者による国民国家を分析する枠組みを使って中国の「民族国家」、共同体の形成における「継承性や変容・再編のプロセス」を検証する必要性はもともと存在しなかった。

小嶋論文が指摘したように、20世紀の末期から中国の学界における動きも、中華民族という言葉説をいかに円満に解釈するかということより、むしろ民族国家理論が中国にとって適当ではないという現実に気付き、中華民族の多元性を強調することに重心を移った。この点について意識しながらも、なおナショナリズムの視点から「中華民族をめぐる言説と東トルキスタンにおけるジェディッディズム」の間に共通性があるかどうかを比較し、中国に同時に二つ以上のナショナリズムが存在することを証明しようとしたのは、小嶋論文であった。

民族国家（国民国家、nation state）の理論は、いかなる回路でいかなる形で中国に紹介さ

れ、そしてなぜ中国の思想家によって積極的に受け入れたのか。この問題に関連して、まず日本の近代の歩みと中国との関係（中国人に近代国家建設における「民族」の有効性を意識させたのは、1890年代以降の日本の「日本主義」と「国体論」であった）^v、そしてアメリカが果たした役割、つまりウイilsonが世界秩序構想の原則として提起した14か条が中国に与えたインパクトなどを考えなければならない。しかし、20世紀の歴史がすでに証明したように、民族国家の論理を發明し、正当性を主張した国々の人にして、けっして民族国家によって規定された主権の領域、国境を神聖なるものとは考えなかった。そのため、近代社会を研究対象とする際にナショナリズムまで分析の視野を広めることが必要だとしても、ナショナリズムを絶対視することはやはり避けるべきであろう。

ⁱ これについて、拙著『20世紀中国の国家建設と「民族」』（東京大学出版会、2006年）序論とあとがきの部分が詳しい。

ⁱⁱ 拙著『20世紀中国の国家建設と「民族」』第三章『中華民族国家』の構築——近代中国における国民国家理論の実践——を参照。

ⁱⁱⁱ 拙著『東トルキスタン共和国研究—中国のイスラムと民族問題』（東京大学出版会、1995年）第一章「東トルキスタン独立運動の歴史——運動の社会的背景と発生形態」を参照。

^{iv} 王柯「『漢奸』考」, 岩波書店『思想』, 981, 2006年1月号, 39-41頁。

^v 拙著『20世紀中国の国家建設と「民族」』第二章『民族』、近代日本から来た誤解——中国における国民国家言説の起源——を参照。